

Georges Michel

ジョルジュ・ミシェル (1763-1843)



作品名 逆光の中の風車
Moulin à contre jour

種類 キャンバスに油彩

サイズ 47×62cm (仏 P12 号)

略 歴

政治家でもあり、ロマン主義文学の指導者でもあったシャトーブリアンは、18世紀の末に、早くも芸術家たちに、自然の中へ出て行って、自然から直接学ぶことをすすめていた。彼は同一の風景を一日の異なった時間に、同一の風景を異なった季節に描くことをすすめていた。彼の忠告はイギリスのコンスタブルやターナー、フランスのバルビゾン派の画家たちの絵によって具現されるが、彼らよりも早く、同一の場所を様々な時間帯に、さまざまな角度から、自然に即して描いていた画家がいた。モンマルトルに住み、心にしみる荒涼たるモンマルトル風景を数多く残したジョルジュ・ミシェルである。

若い頃から17世紀オランダ風景画家たちにひかれていた彼は、つくりものではない、現実的な風景を最初に描いたフランス人といわれている。時代に先行しすぎていた彼は、生存中はほとんど世に受け入れられず、死後、ルソーとデュブレによってはじめて、正当な評価を与えられたという。

彼の絵には、初期の作品を除いては、サインが入られていない。「私は自分の絵にサインをしない。絵はそれ自身で語らなければならないから」と言明していたミシユルの絵は、彼の時代の中で、際立った特徴をみせている。光りを含む黄褐色の色調、荒々しい筆致、風車のあるモンマルトル風景、どれひとつとりあげても、十分にサインの役目をするものであった。そしてそれゆえに、当時のアカデミーに受け入れられるものはなにもなかった。彼はほとんどモンマルトル付近の風景しか描かなかったが、自分のすべてを描くためには、丘へ登り、そこからつづく小さな森の中を歩き、その近郊を訪れるだけで十分だと信じていた。1810年頃からはサロンへの出品もやめてしまうが、彼の絵はその後ますます力強くなっていったといわれている。彼の絵は、1879年にルーヴル美術館に抑え入れられ、近代風景画の先駆者として名を不滅のものとした。バルビゾン派での制作はしていないが、バルビゾン派の画家、バルビゾン派の先駆者ともいえる。

飯田昌平著・バルビゾン派の画家たち 村内美術館名品選より